

社会学部設立 30 周年
関西学院創立 100 周年 記念論文集

デュルケーム研究の回顧と現状

小 関 藤 一 郎

I

デュルケームの著作集三巻 Textes 3 vols, がカラディ V. Karady の編纂によって刊行されたのは1975年である。これは、それまでまとまった形で刊行されなかったデュルケームの論文、書評等をまとめて読者に参照の便をはかったものであるが、デュルケームの著作はこれで大体完成したこととなった。筆者はすでに他のところでも述べてきたが、デュルケームの著作で、彼の生存中に刊行されたものはその三分の一程度で、死後、モース M. Mauss やアルヴァックス M. Halbwachs など、デュルケーム学派の人びとによって編纂され刊行されたものが多い。たとえば論文は別として著作となった「教育と社会学」(1922)、「社会学と哲学」(1924)、「道德教育」(1925)、「社会主義」(1928)、「フランス教育思想史」(1938) は戦前に刊行され、戦後になって「社会学講義」(1950)、「モンテスキューとルソー」(1953)、「プラグマティズムと社会学」(1955) が刊行されたが、さらに社会学年報の中の論文六篇と書評の重要なものを集めてデュヴィニョオ J. Duvignaux は「*Journal sociologique*」(社会学記録)を1969年に刊行し、フィユー J. Filloux は1970年「社会学と行動」と題し、デュルケームの政治的関心を表明したいくつかの論文の集録を刊行してきた。そして最後が上述の著作集三巻である。そして戦後になってデュルケームの書簡もいろいろの形で刊行されるようになったから、デュルケームの全集が一応完了した形になる。ただ全集という形での刊行が比較的好まれないフランスで

は、そうした形での刊行は行われそうには見られない。ところでこの1975年を中心として70年代はデュルケーム研究にとっては非常に注目すべき時期で、著作集以外に「フランス社会学評論」R. F. S. の1976年第2号はデュルケーム特集号を刊行したほか、多くのデュルケーム研究が発表されたほか、ベナール教授Philippe Besnardを中心に「デュルケーム研究会」が発足した。また、ルモンド紙は1970年に「Emile Durkheim relu et enrichi」という特集号を5月3日、4日連続して出し、多くの人びとの研究を掲載した。その他英米独などで刊行されたデュルケーム研究書を見ると、A. Giddens (1971)、R. Bendix (1971)、La- Capra (1972)、G. Poggi (1972)、Wallwork (1972)、Lukes (1972)、G. Davy (1973)、Inge Hofmann (1973)、T. N. Clark (1973)、R. A. Nisbet (1974)、H. P. Q. Hirst (1975)、W. Pope (1976)、J. C. Filloux (1977)、R. König (1978)、E. A. Tiryakian (1978)¹⁾ などがある。さらに1979年「フランス社会学評論」は「デュルケーム学派」特集を刊行した。これは従来デュルケーム研究の陰にかくれて比較的等閑視されていたデュルケーム学派の問題に大きく焦点をあてたものであるが、これによってデュルケーム研究にとっても重要な一面が改めて見直されたのである。こうしたことから1970年デュルケーム

-
- 1) I A. Giddens, (1971) *Capitalism and Social Theory*
 - II R. Bendix, (1971) *Scholarship and Partisanship*
 - III La Capra (1972) *Emile Durkheim, Sociologist and Philosopher*
 - IV G. Poggi (1972) *Images of Society, Essays on the Sociological Theories of Tocqueville, Marx and Durkheim*
 - V S. Lukes (1972) *Emile Durkheim; His Life and Work*
 - VI E. Wallwork (1972) *Emile Durkheim, Morality and Milieu*
 - VII G. Davy (1973) *L'Homme, le fait social et le fait politique*
 - VIII Inge Hofmann, (1973) *Bürgerliches Denken, Zur soziologie Emile Durkheim*
 - IX T. N. Clark, (1973) *Prophets and Patrons, The French University and Emergence of the Social Sciences*
 - X R. A. Nisbet (1974) *The Sociology of Emile Durkheim*
 - XI H. P. Q. Hirst (1975) *Durkheim, Bernard and Epistemology*
 - XII W. Pope (1976) *Durkheim Suicide*
 - XIII J. C. Filloux, (1977) *Durkheim et le socialisme*
 - XIV R. König (1978) *Emile Durkheim, Zur Diskussion*
 - XV E. A. Tiryakian (1978) "Emile Durkheim", in T. Bottomore and Robert Nisbet (ed), *History of Sociological Analysis*

ム・ルネッサンス²⁾という言葉さえ研究者の間から叫ばれたのである。ここで注意しておきたいことは、表面的にデュルケーム研究とは名のついてはいないが、バランディエ G. Balandier の著作「意味と力」*Sens et Puissance* (1972) で、これはバランディエの1950年からかかれた多くの論文の集大成であるが、その最初の論文「社会動学」*La Dynamique Sociale* はこの書のためにかかれたもので、この中でデュルケーム社会学が社会動学考察においてどんな重要な意義があるかについての、すぐれた指摘がなされているのである。バランディエが主として社会人類学の領域で活躍しているため、その社会学考察の面は忘れられているが、デュルケーム研究にとって他の研究者とは異なった視点からの重要な考察を無視することはできない。そうした点を考えると、他の学科なり、専門領域の研究にも正当に評価されるべきものがまだ残されているのかも知れないが、筆者の能力では残念ながらそこまでは手が届かないことを認めざるを得ない。

さてこうしたデュルケーム研究は、1980年にいたってもまだ継続している。デュルケーム研究所の刊行している Bulletin の文献表を見ても、毎年のようにかなりの数の論文が報告されているのを見る。そしてデュルケームを根本的に見直そうという試みが多くなされている。論文については、上記の Bulletin を参照して貰うこととして、著作だけに限っていくと、B. Lacroix (1981)、S. Taylor (1982)、A. C. Alexander (1982, 1988)、P. Besnard (1987)、W. S. F. Pickering (1984)、R. Jones (1986)、S. Fenton et al. (1984)、Mike Gane (1988)、F. Pearce (1989)、S. G. Mestrovic (1989, 1990)³⁾ などが相次いで刊行されている。そしてこれとともにデュルケームの著作で、戦後もまとめて記

2) デュルケーム研究は彼の生誕百年を記念して、多くの著作がその前後に刊行されている。その主要なのは K. Wolff (ed) *Emile Durkheim 1858-1917* (1960) R. Aron, *Les étapes de la pensée sociologique* (1967) やそれより少し前の G. Gurvitch, *La vocation actuelle de la sociologie* (1955) などがあるほか、パリ大学の *Annales de l'Université de Paris* の特集号 *Centenaire de la naissance de Durkheim* があるほか、AJS も1958年ジンメル・デュルケーム特集号を出している。

3) I B. Lacroix 1981, *Durkheim et le politique*

II J. C. Alexander, *The Theoretical Logic in Sociology* vol. 2, *The Antinomies of Classical Thought, Marx and Durkheim*.

されなかった各種の論文を一定の主題ごとにまとめ、それに関する説明、序文を付したり、あるいは問題に関する重要な研究者の論文を付した著作がこれまた相当多数にのぼっている。それを列挙すると、1) R. N. Bellah, *Emile Durkheim on Morality and Society* (1973) 2) W. S. F. Pickering *Durkheim on Religion* (1975)、3) W. S. Pickering *Essays on Morals and Education*、4) M. Traugott, *E. Durkheim on Institutional Analysis* (1979)、5) Lukes & Scull (eds), *Durkheim and the Law* (1983)、6) Giddens, *Durkheim on Politics and the State* (1986) などである。それらは従来の著作で英訳されているもののほか、英語の読者には手の届かないところにあった重要論文が相次いで英訳されてきたのである。わが国でも1970年代には富島喬、佐々木孝賢、小関藤一郎、中久郎などの研究書が相次いで刊行されたり、著作にはない論文の訳出も行われ、例えばモンテスキューとルソー（小関・川喜多共訳）の中には、デュルケームの初期のいくつかの論文が併せて訳出されている。このほか宗教社会学論文集（1983）があるほか、デュルケームの家族社会学論文集（小関編訳）も1972年に刊行されてきている。

最後にあげなければならないのは ASSR 誌が n. 69 (35^e année, janv-mars) 1990 を *Relire DURKHEIM* と題する特集号を刊行したことで、R. N. Bellah, E. Schoenfeld, J. C. Filloux, R. A. Jones, W. S. F. Pickering, B. Lacroix, F. A. Isambert, J. C. Alexander など、最近デュルケーム研究において活躍している人たちの論文を掲載していることである。

同誌は宗教社会学研究雑誌であるにもかかわらず、もっと広い角度からデュルケームの意義再検討を提唱しているのである。これらはデュルケームの生命

III “ 1988, *Durkheim on Sociology*.

IV W. S. F. Pickering 1984, *Durkheim's Sociology of Religion*

V S. Fenton et al, 1984, *Durkheim and Modern Sociology*

VI R. Jones, 1986, *Emile Durkheim, An Introduction to Four Major Works*

VII Mike Gane, 1988, *On Durkheim Rules of Sociological Method*

VIII France Pearee, 1989, *Radical Durkheim*

IX S. G. Mestrovic (1989) *Emile Durkheim and the Reformation of Sociology*

X S. G. Mestrovic (1990) *Coming Fin de Siècle*.

が実に長いことを感じさせるのである。

II

以上見たように、1970年代以降デュルケーム研究は非常に活発であり、それは今日まで続いている。これは戦前デュルケームの生存中から30年代終りごろまでの状況と比べると全く大きな隔りである。これは戦後の世界各国における社会学の躍進を反映したものではあるが、1930年頃までは、デュルケームについて書かれた著作といえば、Gehlke の *Emile Durkheim's contributions to Sociological Theory* (1915) とか R. Lacombe, *La méthode sociologique de Durkheim* (1926) ぐらいの著作と若干の論文しかなかったのだから、極めて大きな時代の違いが感じられるのである。しかも当時のデュルケームに対する批判はその著作全面にわたって問題をとりあげたものではなかったし、デュルケームの生活した時代の社会的状況との関連において、その理論を把握しようとしたものではなかったのである。

ルークスは大著「エミール・デュルケーム、歴史的ならびに批判的研究」において一章をさいてデュルケーム存命中から彼に対してなされた批判を扱っている⁴⁾。当時の批判はいろいろの角度からなされており、デュルケーム理論を理解するために重要な意義をもつものが少くないのであるが、デュルケーム社会学を全面的に眺める立場からなされたものは余り多くないといえるのである。デュルケーム研究でその著作を全面的に捉えてなされたものとしては、H. Alpert の「エミール・デュルケームとその社会学」*Emile Durkheim and His Sociology* (1939) であるが、後に与えた多くの影響から重視されなければならないのは、T. Parsons の *The Structure of Social Sction* (1937) におけるデュルケーム研究である。この著作の第8章から第12章までの5章がデュルケーム考察にあてられている。パーソンズはこの中で、デュルケームを彼の提唱する構造機能主義理論の思想の先駆者の一人であるとして、デュルケームの社会学理論を分析しているのであるが、パーソンズはデュルケームの考え方が「社会

4) Chap. 25, Durkheim and His Critics pp. 497 - 526.

分業論」からはじまり、最後の著作「宗教生活の原初形態」に至る間に大きく変化しており、その変化は4つの段階に分けることができるというのである。

デュルケームのいう「社会的なもの」le social が徐々に変化していることを明らかにした研究は、このほかダヴィ G. Davy などにも見られる⁵⁾。ダヴィはデュルケームの著作が晩年になるほど le social は崇高性を増していることを明確にしているのである。そうした傾向の指摘は他の研究者にも見られるが、パーソンズのように4つの段階に分けられるという見方には異論が多いし、パーソンズがこの研究を書いた時代にはデュルケームの著作で1937年以降に刊行された重要な著作は刊行されていなかったし、そういう文献を参照することなしにデュルケームの社会概念の変化を主張することは十分な論拠によらなかったものといえるであろう。いずれにせよ、le social が変化してきていることは否定できないが、4つの段階という分け方は事実まったく反する。さらにデュルケームの著作の刊行された年代順は必ずしと著作がかかれた順位ではない。とくにデュルケームの死後発刊された「社会主義」は1900年以前にボルドー大学での講義としてかかれたものであり、戦後1950年刊行された「社会学講義」Leçons de sociologie も20世紀になる以前に書かれているのである。また「道德教育」にしても、それはすでにボルドー大学において講義されたものであり、パリ大学でも講義されはしたが、その着想は社会学講義と全り隔った時期ではなかったのである。そうした文献が書かれたり、構想されたりした年期についての十分な考察をすることなく、ほとんど生存中に刊行された4つの大著だけに依拠してデュルケームの考え方の変遷を段階にわけたのは著しく妥当性を欠くものといわなければならない。パーソンズのデュルケーム研究はデュルケームだけについての著作でではなく、マーシャル、パレート、ウェーバーなどに関連して論ぜられた著作の一部であるが、170頁にも及ぶ著作にも等しい大きい分量の論述中に展開されているから、ここでその詳細を論ずることはできない。その要点は「デュルケームの初期における考察の重要なものの一つは

5) G. Davy, *Le Social et l'humain dans la sociologie durkheimienne* R. P. 142 (1952) pp. 321 - 50.

秩序の問題であって、その問題の解決のために功利主義的な考え方がいかに不十分であるかを明らかにし、彼独自の立場からそれに適切な見解を展開しているものである。

デュルケーム論のこの試みの中で注目されるのは、行為の内在的目的・手段関連との関係における共通の価値的要素としての社会的要因の指摘である。これによって「デュルケームは功利主義の見解を克服することに成功したのであるが、その考察には社会変動に対する理論の欠如が顕著に看取さる。デュルケームはさらにこうした行為の構成要素としての価値、規範の存在を明らかにしただけに止まらず、さらにこの行為の要素を一つの観念体系として見るにいたり、行為者たる社会の成員はそれをあたかも永遠の対象として消極的に観想するにすぎなくなるというように考えるまでになり、終局的には観念論 *idealism* に到達しかけている」というのである。上述したようにデュルケームの考え方、とくに *le social* が変化してきたのは事実であるが、観念論に到達していると断定するのは正当ではない。ただデュルケームの後期の著作には、現象学的な考え方に近いものが含まれていることは否定できず、Tiryakian などもすでに1962年 *Sociologism and Existentialism* の中でその点を指摘し、社会学主義が実存主義に接近している面があることを明らかにしている。その点ではパーソンズより先に進んでいるが、パーソンズがデュルケームは経過 *process* よりは実体的範疇によって考えていて、社会的事実に顕われた実体を常に求めていたのだから、デュルケームの観念論は彼の長い期間に及ぶ考え方の発展の到達点であると見るのもいきすぎであろう。しかし、それよりも問題なのは、デュルケームの社会的要因 *le social* は目的・手段との関係における行為の共通の価値的要素であるという見方である。

デュルケームには必ずしもパーソンズのこのような行為における価値規範的要素という考え方は明示的には存在しない。むしろデュルケームの社会の構成には「方法論」の第一章の社会的事実は何かに見られるように、社会の層位的構造ともいえる考え方が存在するのである。もちろんこの層位構造の動力的要因として集会的表象 *représentations collectives* が考えられ、その中核をなす

ものとして集合意識 conscience collective がはたらいていると見ることはできる。しかし、それはパーソンズのいう価値体系というよりは、世界観的なものを含む知的要素が強く混入しているのである。デュルケームはしかしながら、決して決定的要因を探求しようとはしていない。デュルケームが社会的事実の外的指標として捉えた拘束性が、たんに外的指標にとどまらず、社会現象の説明的な要因にまで高められていることはあるが、それは価値規範的なものとしては把握されていないのである。自説の先駆を準典理論に求めようとしてパーソンズはデュルケームの考え方を余りにも自分の説に強引に結びつけてしまっているようである。またデュルケームは社会分業の研究において、分業を社会の機能として見ていこうという考え方から出発しているし、その他の宗教などの社会現象をその社会的環境との関係において把握する方針を明白にしているが、それは必ずしも構造機能主義的な立場を予想したものではないし、社会的環境の概念が必ずしも一義的なものではなかったことから考えても、構造機能主義と必然的に結びつくものではないというべきである。それ故に構造機能主義からのデュルケーム解釈が最も適切なものであり、最も価値あるものであるということにはならないのである。パーソンズのデュルケーム解釈は極めて重要な意味をもち、また人をひきつける所が非常に大きいものであることは否定できないが、アメリカの一部の学者にはデュルケーム解釈はこれが最も正しいと見、デュルケームをパーソンズを通じてしか見ない人が少なくないので、このことを指摘することは重要であると考えられる。

とくにパーソンズの指接で重大な誤りはデュルケームの考察には顕著に明白な変動理論が欠如しているという指摘である。パーソンズは「社会体系論」の結論で、社会変動の理論は現在の社会科学の知識では不可能であるとのべ、それは社会体系の要素が余りに多く、それらの関連が明らかにされないからであるとのべている。「社会的行為の構造」を書いた段階でのパーソンズは恐らくこうした考え方に立っていたと考えられる。社会変動に関係する要素が多すぎて、それらの関連を明らかにすることは極めて困難であり、また社会変動の理論が不可能であるからといって、デュルケームの理論の中には、変動に対す

る考察が全く欠けているとみることはおかしい。デュルケームを全く構造機能的立場から見るとそう思われるかもしれないが、デュルケーム自身の社会の層位的構造的立場からすると、変動はまた別の形をとって現わることになるのである。変動は層位間に必ずしも正確な対応関係が存在しておらず、夫々の層位の動きにはずれがあるのが当然であるといった形をとって現れているのである。それはマルクスのような下部構造が変化し、それに応じて上部構造が動くという形をとるのではない。デュルケームは社会形態的事実を基体 Substrat⁶⁾と名づけているが、それはある時点においてそれが社会生活の基本をなすように見られることから名づけられたものであって、決してそれが変動の原動力的な作用をするということを意味しているのではないのである。むしろ原動力的なものといえば、人間の共同意識のある面が強くはたらくことが歴史的現実態においては多いことが示唆されている。そして基本的には、社会進化論的な考え方の影響を強く受けて、社会的事実の変化は原型 prototype が外的状況に応じて、この通時的に展開していくという形で理解されている。そしてその展開にあたって人間の意識的作用の力が強くはたらいっていることが特に「教育思想史」の中では明らかにされている。

しかし、デュルケームはたんに観念的要素の優位というような単純な発展図式ではなく、具体的な社会的状況の中において意識的要因が他の諸条件と緊密に作用・反作用を繰り返しながら、社会変化を導いていくのであるが、同時に集合表象的層位と機能面の層位および形態学的層位の運動の速度は対応して同じように進むのではなく、その間に著しいズレが生じているという多様な形の変化の存在することが明らかにされているのである。たとえば、ルネッサンスはたんに中世の否定あるいはスコラ哲学の排除にあるとするのではなく、スコラの論理的精神が新しく登場してきた社会的勢力と結びついて新しい文化を建設してきたのであり、しかも新しい社会的勢力の登場を促したものに社会的流動性の増大や、ヨーロッパ各国民の社会間における交流の躍進などの役割もあったことが指摘されている。しかもこうした社会の動きにもかかわらず大学の

6) *Règles de la méthode sociologique* chap. 1.

組織には余り大きな変化は生じなかった。中世の同業組合的特性をもって成立した大学は外的条件の変化にもかかわらず存続してきていることをデュルケームは注意している⁷⁾。こうした変動についてのデュルケームの所説は歴史的事実についての注意深い観察から得られたもので、それら変動についての理論的考察は十分には行われてはいない。それにもかかわらず変化に対する視点がなかったのではない。その点パーソンズの分析はまったく不足していたといわざるを得ない。パーソンズの影響を深くうけた研究に Poggi のものがあげられるし、その他アメリカの研究にはパーソンズを通じてしかデュルケームを見ないと見られるものが多い。しかし、そうしたパーソンズの観点からではなく、デュルケームの最も本質的な面を明らかにしようとした試みとして Wallwork の研究はすぐれたデュルケーム理解を示したものである。

III

Wallwork の研究はデュルケームの道德社会学ないしは道德哲学についての考察といってよいものであるが、デュルケームの著作の中、とくにアメリカの社会学者たちから非常に等閑視されてきた道德に関する考察を全面的に観察研究したものである。しかも彼は他の多くの研究者と異ってデュルケームの1885年頃からの著作、とくにドイツ留学の成果をまとめた「ドイツにおける道德の実証的研究」*Le science positive de la morale en Allemagne*⁸⁾ (1887) や「ドイツ大学における哲学教育」*La philosophie dans les universités allemandes*⁹⁾ (1887) にまで遡って道德に対するデュルケームの関心が彼の社会学構想の基本となり、それがその後の著作を通じて、どのように発展してきているかを明らかにしている。Wallwork によると¹⁰⁾「デュルケームの社会学上の諸々の発見はその道德的諸問題に対する関心と研究の副産物である」といわれるのである。この著作はデュルケームの社会学の根本を道德研究と見てい

7) 拙訳「フランス教育思想史上」第14章。

8) *Textes*. vol. 1.

9) *op. cit.*,

10) Wallwork, (1, vi.) p. 182.

るのであるが、それは上記のドイツ留学の成果から、最後に1917年 *RP* 誌に掲載された論文が “Introduction à la morale” であったし、モースもデュルケームが最後に *La Morale* について著作を完成させるべく努力をしていたが、晩年病気に倒れて実現しなかったとのべていることからみても頷かれることである。とくに *Wallwork* はデュルケームバヴントの「倫理学」*Ethik* に注目し、それを丹念に報告していることを重視しているが、そのことは道德に対するデュルケームの関心がいかに深いものであったかを如実に示しているのである。デュルケームが後の多くの著作にとりあげられた問題の大部分はこのドイツの道德研究に関する報告においてとりあげられている。そして学位論文として書かれた「社会分業論」も分業をたんに利益増進の点からみた功利主義の考え方に反対して、道德的事実としてとりあげられたのである。その点を強く強調した第一版序文は第二版以降何故か削除されてしまい、1975年の *Textes*¹¹⁾ に再録されるまで多くの人から忘れられていたのである。

自殺論も有機的連帯に基づく近代社会における道德の確立の必要性を訴えたものであり、「社会主義」もサン・シモンの社会主義思想についての論理的な解説であるが、そこでも産業化社会における経済活動が自由に発揮されることの必然性と同時にそうした *industrialisme* には新しい道德が根底にならなければならないことが銘記されているのである。「道德教育」はもちろんであるが、この書ではとくに非宗教的とか脱宗教的というべきか、教会を離れての道德の構成要素の分析とその適用の技流の問題がとりあげられているのである。さらにまたデュルケームの著作としては死後になって1950年に刊行された「社会学講義」*Leçons de sociologi: physique des mœurs et du droit* も職業道德、公民道德 *Morale civique*、契約道德に関する考察がその中核となっているのである。だからデュルケームの近代社会の映業に関する考察はほとんどすべて道德に関係しないものはないとさえいえるのである。

社会学年報の刊行に当たっての協力者ブーグレはデュルケームの社会学は道德

11) *Textes*. vol. III d

社会学である¹²⁾とのべていたが、本当に肯綮にあたるものである。ただデュルケームは1898年から刊行された社会学年報 *L'Année Sociologique* の編集に当たようになってから、発表された論文には未開社会あるいは近代以前の社会に関する問題をテーマにしたものが多くなっている。1912年の大著「宗教生活の原和形態」もそうであるが、社会学年報は第一輯（1898－1912）に発表された著作はほとんど近代社会には直接関係ないものである。「近親婚の禁止」¹³⁾「宗教現象の定義」¹⁴⁾「刑法進化の二法則」「分類の未開形態」¹⁵⁾「トーテミズム」¹⁶⁾「オーストラリアにおける婚姻組織」¹⁷⁾などはみなそうである。デュルケームは社会学年報の第6巻にこの巻から文献の批判的検討、紹介にあてられた部分の分類項目にはじめて「集合表象」*représentations collectives*を採用したとのべているが、この集合表象項目でとりあげられている著作にも、未開社会など近代以前の社会に関する著作が多くなっている。しかし道德に関する関心は減少している訳ではなく、ルークスの著作の附録にあるデュルケームの大学における講義の一覧表によると、すでに1898－9年ボルドォ大学の講義で道德教育は行われている。そして次の年も繰り返えされ、パリでも繰り返されている。1905年には「神のない道德」についての寄稿を *Revue* 誌によせ、1906年にはフランス哲学会で「道德的事実の決定」を報告している。この報告は1924年刊行の *Sociologie et philosophie* に収められているほか、1902－3年以降パリ大学の講義でも道德と社会、法と習俗の物理学かどが講義されている。だから社会学年報に大きな精力は注がれはしたが、道德は常にデュルケームの心の中で大きい位置をしえていたのである。

こうした著作は Wallwork の著作ではもらすことなく参照されている。こうして見るとデュルケームの著作活動は初期のドイツ留学の報告論文以降かなり

12) C. Bougle, E. Durkheim in Seligmans, *Encyclopedia for Social Sciences*.

13) 拙訳「デュルケーム家族理論」(川島書店)

14) 拙訳「デュルケーム宗教社会学論集」(行路社)

15) 拙訳「分類の未開形態」(法政大学出版局)

16) 拙訳「分類の未開形態」(法政大学出版局)

17) 拙訳「デュルケーム家族理論」(川島書店)

後年にいたるまで道徳が中心的主題となっていたのであることは明白である。そうした点をフォローした Walluork の著作はデュルケーム研究史においても類例のない重要性をもつものなのである。ところでこのことと関連して、われわれはデュルケームの政治に関する考察を見ていく必要がある。B. ラクロワ Bernard Lacroix は¹⁸⁾デュルケームにおける政治への関心がその活動の初期から非常に大きいものであったことを指摘している。しかしラクロワによると、この政治への関心が段々と宗教に移行してしまったというのである。しかしラクロワは、デュルケームが晩年になっても平和主義の問題や愛国心あるいは公務員の職業倫理などについての討論会で重要な発言を行っていることや、ドイツとの戦争が始まるや祖国の戦争遂行に協力して行った活動とくに1915年刊行の“*L'Allemagne au-dessus de tout*¹⁹⁾”などの小冊子物発行などの点についてはまったくふれずにいる。たしかに上述したように、社会学年報の刊行以降デュルケームの活動で宗教に関するものが大きな比重を占めていることは否定できない。しかし政治的問題に対する発言や論述も少なくない。そうしたものの中には公務員の職業倫理や社会平等の観念などに関するもののように道徳と非常に関係がふかいものも含まれているのである。だからラクロワのいうように、関心が政治から宗教へすっかり移行したと見ることは正しくない。ラクロワは最近の論文²⁰⁾でデュルケームが独創的な著作であるのは次の三つの点からであるとしている。第一は彼がその時代の社会を政治的眼を以て考慮していたこと。第二は彼を保守主義の立場において見る考え方に反し、彼は個人の自由を重視する自由主義的な選好的態度 (*préférences libérale*) と社会の実質的な優位に対する合理的確信との間に悩んでいた理論家であること、第三は彼の理論からは客観主義だけしか見ようとしない人びとの考え方とは反対に、たえず

18) 3) の 1.

19) この著作とほとんど同じ時期に “Qni a voulu la guerre : les origines de la guerre d'après les documents diplomatiques (1915) も刊行されている。

20) Bernard Lacroix, “Aux origines des sciences sociales françaises : Politique, société et temporalité dans l'œuvre d'Emile Durkheim” ASSR (69) 1970 Janvmars p. 109 - 128.

時代性 *temporalité* の不安に対して常に多大の関心をもった著作者であったことである²¹⁾。ラクロワは、このような点から特にデュルケームが現代性に対して深甚な関心をもって社会を考察したことを重視している。そのことは、政治の問題が彼の頭から一刻も離れることのなかった道徳の問題と不可分に結びついていることの証左であろう。そしてそうした問題の考察はデュルケームの考え方を力動的に解する必要とするのであるとラクロワは見る。この論文でラクロワはデュルケームの知的作業の中に二つの往復の動きが見られるとして次の点を指摘している。その時代の政治に対する関心から、彼はこの政治活動がその中で行われる形態と枠組の社会的構成に対する考察を向けていった。同時に彼の社会学建設の出発点となる問題意識の方式化は、同時に彼の理論的立場の正当化するために役立っているのであると²²⁾。つまり、現在を理解するために過去を参照することが必要となるが、また過去の分析によってデュルケームは現在の中における立場を確立できるのであるという。デュルケームの歴史に対する依拠、歴史回顧のもつ意味をラクロワはこのように理解している。こうしてデュルケームの社会変動に対する視角を従来とは異なった視点から見直しているのである。しかし現在における位置づけを確立させることは、政治道徳を緊密に関連あるものとして捉えると同時に、観察者のそれに対する深い関与を自覚することなのである。ラクロワはさらにデュルケームの見方を、アナル学派²³⁾との関係において捉えようとしているが、筆者にはまだ手の届かない所にある問題であるから、それに言及することは別の機会まで待ちたい。

こうした道徳問題に対する研究が、デュルケームにおいてもつ意味の再検討、再解決は1970年代から多くの研究者によって行われており、A. Giddens もデュルケームの個人主義は *moral individualism* であると規定し、その特質を明らかにする著作を発表しているが、Giddens のデュルケーム研究で重視すべ

21) *op. cit.*, p. 110.

22) *op. cit.*, p. 119.

23) アナル学派 *Annales* とは、歴史学者 L. Febure や M. Blech によってはじめられたフランスの歴史研究の学派。現在機関誌 *Annales, Economie, Cérilization, Société* が刊行されている。。

きなのは、*Durhheim on Politics and State* 1986 である。英語国でもデュルケームに対する関心の増大に応じて、「国家論」をはじめ、多くの論文を編訳したのがこの書で、その巻頭にデュルケームの政治社会学のもつ意義についてすぐれた序文を付加している。政治に関するデュルケームの著作はこのほかにも平和問題や愛国主義についての討論に参加して行った発言があるし、またドレフューズ事の際にブリュヌチェールに抗して発表された有名な「個人主義と知識人²⁴⁾」があるが、これは現代社会の宗教を個人主義であると見る立場からは宗教関係のものとも見られるが、英訳はすでに1969年に行われている。そのため Giddens のこの著書には採りあげられていないが、デュルケームの政治的立場がいかに保守的なものとかけはなれているかを明確に示したものである。しかし同時にこの論文は、いわゆる「知識人」の役割について論じたものと見ることもできるので、職業道德の問題を扱ったものともみることができる。この論文はベラー編の編訳 *Durhheim on Morality and Society* には収められている。

こうしてデュルケームの道德と政治に関する著作が著しく進められ、また深められていったことは、70年代以降の注目すべき現象といえることができる。

IV

1980年代のデュルケームの研究で重視されなければならないのは、Pickering の *Durkheim's Sociology of Religion: Themes and Theories* (1984) であろう。これは600頁に近い大著である。Pickerling はすでにその前にも、デュルケームの「宗教論集」および「道德および教育論集」が刊行されているが、この著作はデュルケームの宗教に関する著作でも、今まで書かれたものよりはるかに包括的でしかも大きい視野に立って書かれたものであるといえよう。余りにも浩瀚な著作であるから、どれだけたくさんの人びとに読まれているのかと思われるほどである。

著者はこの書の刊行の年に、筆者に対して日本ではどの位の人が関心をもってくれるだろうかと手紙で問い合わせをしてくれたことがある。デュルケームの

24) 上記注 13 にある「宗教社会学論集」中の第三論文。

宗教論の中、将来の宗教に対する予想でベラーのいう市民宗教的な考え方のあることは多くの人に認められているとおりであるが、そうした問題がアメリカなどで注目を惹いていた頃この書は刊行されたので、筆者も比較的早くこれを繙いたのであった。デュルケームの宗教についての考え方は、日本でも宗教民族学などの分野の人には早く知られていたし、「原初形態²⁵⁾」は文庫本にもなっているので、かなりの読者はあったと思われるが、この原書も膨大であるため、それに適わしい評価をうけていなかったように思われる。1980年代になって、イギリス人の学者によってこうした著作が刊行されたことは色々な意味で注目すべきことであるように思われる。まず著作の構成から見ていこう。全体は六部 Parts から成っており、Part I では歴史的回顧、デュルケームの宗教探求の起源から著作に現われた彼の考え方の発展、Part II はデュルケームの社会学的立場の形成、Part III は信仰と観念、Part IV は儀礼と沸騰の集合、Part V はデュルケームの現在する宗教（カトリシズム・プロテスタティズム）に対する態度と新しい人間崇拜の宗教、Part V デュルケーム学派における宗教社会者の問題である。文献表も詳細で綿密であろう。「原初形態」の刊行後間もない頃、A. A. Goldenweiser は AA 誌²⁶⁾（1915）にこの著作の書評を行っているほか、1917年には「宗教と社会」と題してデュルケーム学説の批判を行っている。ほかに van Genep も1913年すでに「原初形態」の書評をかいたりしている。しかしその後は、デュルケームのこの著作に対する関心はレヴィストロースが戦後とりあげるまでは、うすれていたようであった。Pickering のこの著作では、デュルケームが「原初形態」にいたるまでに発表した各種の書評、論文等は直接宗教に関係ないものまで網羅的に目をとおしているだけでなく、彼の著作刊行時までに発表された各国の文献をすなり調べあげている。だから文字どおり、この著作はデュルケームの宗教についての包括的研究である。しかもそれは冷静な、貫徹した探究精神によって貫かれている。

25) Les formes élémentaires de vie religieuse を訳して、この略称を用いることにする。

26) "Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Method" 14 (1917) pp. 113 - 124.

Pickerling の数多くの指摘の中、重要と思われるのはロバートソン・スミス Robertson Smith のデュルケームに対する関係についての説明であろう。それはこの著作の第4章第節 (p. 62-70) においてふれられているが、デュルケームがロバートソン・スミスの著作によって得られた教えは、自分にとっては全く啓示的 revelation であったとのべた点についての説明である。この啓示とはどんなものであったのか J. Sump などそれが問題であるが明白ではないとしている²⁷⁾。問題点の一つとして残された点であった。ロバートソン・スミスが宗教の人類学的研究に対してなした貢献の一つは Pickerling によると分析の基礎として儀礼に重要な位置を認めたことである²⁸⁾。デュルケームはそれに従いはしたが、完全にロバートソン・スミスの意見に賛成したわけではなかった。またロバートソン・スミスの供儀に関する研究が革命的な意義をもつことをデュルケームは認めているが、それに対しても批判的でないわけではなかった。デュルケームはユベールとモースの供儀研究におけると同様に、ロバートソン・スミスの理論を退けているのである。ただデュルケームがロバートソン・スミスから学んだ点は、未開社会についての詳細な研究の必要性なのであろうか。フィリップ・ベナールはこの点が重要であることを指摘しているのである²⁹⁾。こうした点をふまえて、Pickerling はデュルケームがロバートソン・スミスから学んだ最も大きい点は次のことにあるという³⁰⁾。

デュルケームは科学の目的に従って、「宗教および社会の構造の中におけるその位置」について普遍化理論を確立しようと欲していた。そうした普遍化は宗教や宗教がその中におかれている社会の類型がどんなものであれ、それに関係なく普遍的適用性をもつものである。ところで、そうした普遍化を設立させるために大切なことは、特定の社会を科学の精神で注意深く検討すること

27) J. Sumpf, "Durkheim et le problème de l'étude sociologique de la religion" *ASR* 20 (1965) pp. 63-73.

28) Pickerling *Durkheim's Sociology of Religion*, p. 65.

29) Philippe Besnard "Une étude sur Durkheim et la politique" *Etudes durkheimiennes* 6 (1981) pp. 1-5.

30) Pickerling, *op. cit.*, p. 102.

である。そしてそこから法則がひき出しうるような十分計画された実験を試みることである³¹⁾。デュルケームは宗教生活についての大著を書くに当って、オーストラリアの社会だけを集中的に研究したが、それはロバートソン・スミスが供犠などについての理論をセム民族の社会についての研究からひき出しているので、そこから重要な教訓を得ているのである。つまり比較研究ということがあちこちの社会にわたって制度を調べて、それを比較するのではなく、単一の社会についてもそこについて十分綿密な計画に基づいて実験的研究を進める方が、科学的には有益な資料と結論を得ることができることを学んだといえる。Pickerlingはこれがデュルケームがロバートソン・スミスを熟読することから得た重要な方法的な教訓なのであることを強調する。こうしてデュルケームとロバートソン・スミスの関係が明白にされたことは重要なことである。もう一つ Pickerling の研究で注目すべきことは、デュルケームの唱える人格崇拜に立脚する新しい来るべき宗教という考え方に対する評価である。ベラーはかつてデュルケームのこういう未来の宗教に対する構想は、彼のいう市民宗教の観念への出発点ないしは土台になっているような見方をとっていたが、新しい人類教というか、人間教というべき未来の宗教観に対して Pickerling は、デュルケームが生存中すでに van Gennep などによる反論をとりあげながら、こうした宗教が真の宗教として成立するためには、宗教の構成に不可欠である行事、儀式の欠如をどう見るかが問題であると考えた。観念面では人間教は存立できるが、そうした宗教でいう *le culte de l'homme* は *cultus* を欠いたものになるのではないであろうかという疑問が生じてくる³²⁾。多くの点でデュルケームは歴史的宗教が過去において、行ってきたことを人間崇拜 *cult of man* は将来において成就することばできると感じている。というのは、デュルケームにとって最も重要な特徴は宗教が個人の意識に対して行使できる力 *force* であるからで、この力によって宗教は人々の道徳的行為に対して大きい影響を及ぼすことができるし、また人々から自制や禁欲に訴えることができると見られるの

31) *op. cit.*, p. 102.

32) *op. cit.*, p. 494.

である。しかし、こうして自覚的に一般化され、内面化される理想は果して人々の尊敬をあつめ、信者をあつめるだけでなく、宗教が存在するのに必要な超越的位置を得られるかどうかが問題なのである。デュルケームが「社会主義」の中で Saint-Simon の Nouveau Christianisme について、それは汎神論に導くものであると非難し、またそうした宗教は利己主義を抑制したり、人間のの心的衝動や要求を抑えることに役立ち得ないのであると論じていることを想起し、Pickerling はデュルケーム自身がのべた言葉が彼のいう未来の宗教にもそのままたてはめるのではないか³³⁾と問題を投げかけている。また未来の宗教が教会をもつことについての言及はされていないが、そうした成員への接点なしに宗教が果して機能を果していけるかどうかとも問題なのである。この問題は今後の社会の問題としても大きな課題を提供しているものといえるであろう。デュルケーム研究がこうした人間の社会の重要な問題に対する意義深い示唆を与えたことは Pickerling の著作の大きな功績といえよう。

V

戦後40年間におけるデュルケーム研究は戦前のそれに比べて数量的にもものすごいものであるだけでなく、極めて内容が多彩であり、デュルケームの多方面の活動をカバーしている。また批判にしても、戦前の批判に見られた言葉尻をとらえたような議論ではなく、デュルケームの理論がどのような社会的、歴史的背景あるいは状況において生れたのかという角度からのものが多くなっている。そうした点から、本稿で最後にとりあげるのは「アノミー」研究である。戦後一番早く「アノミー」研究が出たのは、アメリカの De Grazia の *The political community* (1948) で、これは a study of anomie という副題が付されている。これに続いて R. K. Merton の論文「Social structure and anomie」(1949) がある。これは1938年に書かれた論文の訂正であるが³⁴⁾、この中で

33) Pickerling, *op. cit.*, p. 496.

34) この論文は R. K. Merton, *Social theory and social structure* (rev. ed.) (1957) に収められている。

Merton は人間類型としてアノミー的人間を設定するなど、いわゆるマートンのアノミー理論を展開した。これはデュルケームの用いた用語は踏襲しているが、本来の意味とは全く関係のないものとなっている。その後アメリカでは、60年代にアノミー・スケールの設定など独特のアノミー論が続出してきており、またアノミーが逸脱行動との関係で論ぜられ、本物のアノミーそっちのけのアノミー遊戯というべきものが盛んとなってきている。アノミーの名を冠した論文は無数に出ており、しかもその大部分がアメリカで刊行されたものばかりであることは全く異常的である。こうした点を指摘して「アノミー」の問題の意味を明らかにしようとして書かれたのが、ベナール Besnard の「アノミー論」(1987)³⁵⁾である。アノミーを論じたこの書はベナールの学位論文として書かれたものであるが、この書の末尾に掲載されたアノミー関係の著作は約600にもものぼっている。いかに多くの人が、いろいろの形で、アノミーを論じてきたかがこれによって一目瞭然であるが、内容的にはデュルケームの問題からまったくはずれて、独立して勝手な議論を進めているものが多いのである。ベナールの著作は「アノミー」が Durkheim においてどういう文脈でとりあげられたのか、デュルケーム全体の中でどういう位置をもつのかを明らかにした上で、世界の社会学でどのような取り扱いをうけているかを詳細に論じている。著者によると、アノミーはデュルケームがはじめてその「社会分業論」でとりあげ、次の「自殺論」でもそれが論じられているが、デュルケーム自身の定義も一義的ではなく、何がアノミーであるかを捉えることは困難である。その上アノミー1900年以降のデュルケームの著作からはすっかり姿をかくしてしまっているのである。そうした点を考えるとデュルケームはアノミー学者といわれるほどそれを重視したわけではなく、むしろデュルケームにとって本質的に重要な概念ではなかったといえるとベナールは見ている。筆者もこの紀要の13号で、アノミーはデュルケームの重要問題ではなくなっていることを指摘し

35) Philippe Besnard はデュルケーム研究所の責任者であり、同所発行の *Etudes durkheimiennes* の編集責任者である。

たことがあったのを想起することであるが、ラクロウ (B. Lacroix) も1973年³⁶⁾に、アノミーはデュルケームにおいては一つのものではなく、いくつかの意味をもっていることを指摘していた。ベナールはこの点をデュルケーム著作の年代順の考察によって非常に明確にさせている。そしてまたフランスのデュルケーム学派の人びとによってはまったくとりあげられていないことも明らかにしている。デュルケームの「自殺論」を発展させようとして試みであるアルヴァックス M. Halbwachs³⁷⁾ の「自殺の諸原因」においても、アノミーに関する言葉はまったくないし、その他のモース、ダヴィ、シミアンなどにも全くアノミーに関する言及は見られない。それで「アノミー」がフランスで問題にされたのは、デュヴィニョー J. Duvignaud によってであって、彼の著作 *Durkheim, sa vie son oeuvre avec un exposé de sa philosophie* (1965) の中で、アノミーをデュルケームから受けつぐべき遺産的概念としてみているのが初まりである。

デュヴィニョーはその後、さらに1973年 *L'Anomie* を刊行している。それからしばらくはフランスではアノミーを論ずる試みは影をひそめたようである。アノミーが最も多く論じられたのはアメリカである。ベナールのあげた文献の大部分はアメリカのものである。しかしその大部分はデュルケームから離れて研究者の勝手な問題意識をこの用語を借りて展開しているものである。それはデュルケームをほとんどまともに読まず、たとえばパーソンズの解釈に従ったデュルケームをもとにして論議されている。それとアノミーとはかなり関連も意味も異なるが、60年代のはじめ頃まで盛んになった疎外 Alienation との関連で、あるいはその影響をうけて論じられたり、また逸脱行動との関係で論じられているものが多いのである。ベナールはそのことを極めて丹念に分析している。ルークスもこの疎外との関係については、1967年の著作の中で両者がまったく異なった考え方によつもの³⁸⁾であることを明らかにしているが、「アノミー流行」にはこうしたことも何らか作用しているのかもしれないのである。ベ

36) B. Lacroix, "Régulation et Anomie" chez Durkheim *CIS*, 30 (1973) n. 55.

37) M. Halbwachs, *Les Causes du Suicide* (1930)

38) S. Lukes, "Alienation and Anomie" in P. Laslett, W. G. Runciman (eds), *Philosophy, politics and society*. vol. 3 (1967)

ナールのこの著作は、こうした安易な傾向に対して警告を発するとともに、古典に対する真面目な取り組みの必要を強調している。ベナールの著作はアメリカで反響をよんだようで、80年代の終り頃アメリカを訪れて彼の著作の目的とデュルケーム研究への正しい姿勢をとることの必要を強調している。ベナールは「アノミー」の濫用に対して社会学者は今や「アノミー」に対して墓標を立てるべきであると結んでいる。しかし別の角度から「アノミー論」を重視する声もあがっている。その一人はメストロヴィッチ S. G. Mestrovic であり、もう一人はフランスの労使関係研究の第一人者ジャン・ダニエル・レイノオ J. D. Reynaud である。前者は *Emile Durkheim and Reformation of Sociology* (1988) で、この著者はデュルケームにおけるショーペンハウエルの影響を見ることが従来の研究において忘れられていた点であるとして、デュルケームにおけるショーペンハウエルの影響を探求し、そうしたことの関連から、アノミーのもつ意味を強調するのである。それはマートンなどに見られるアノミー論とは次元を異にするものであるが、メストロヴィッチの研究は、さらに今年になって更に別の著作が刊行されているので、もう少し立ちいって分析されなければならない。それが筆者への次の課題である。レイノオの著作は *Les règles du jeu* 1989 である。レイノオ教授は1978年来日した際に、自分も一度デュルケームの理論を考え直してみたいといていたが、この著者は労使関係の研究から離れて社会学の根本問題を従来の研究の成果をふまえて論じた力作である。この書は「集会的行動と社会的規制」を扱ったものであるが、著者はわれわれが経験し、認識する社会的現実には規則の存在、恒久的に条件が規定されている拘束の存在ではなく、拘束が行使される姿と規制が作動する面である。だからデュルケームの考えたように集合意識を規則をつくり出す場所として想定する必要はないとされる。レイノオはそれで規制をその所与というか与えられ、課せられ面からだけ見るのではなく、規制の過程を重視しなければならないと考える。そうした意味から、デュルケームが「分業論」の中で、19世紀末における労使関係において存在したと指摘したアノミー考察を重視する。そしてその意味でのアノミーは当時の社会的状況に対する考察の特徴であり、それはデュル

ケームの社会学考察の出発点になったものであるから、規制の過程の研究にも生かされることができると考えている³⁹⁾。そうした意味でアノミーが明確に規定されて新しい脱工業化社会の重要問題に考察に適用されることは意味することであろう。デュルケームはこのように新しい社会の動的考察に対して意義ある貢献をしているのである。デュルケームの「分業論」の初版が刊行されたのは1893年である。それから百年近く経た今日、依然社会学の多くの人びとの重大な関心の対象たることを失わないことは、デュルケームの偉大さを物語るものである。

39) J. D. Reynaud, *Les règles du jeu*, p. 31 - 32.

略語 AA = *Archives de Sociologie des religions*
 A.SSR = *Archives des Sciences Sociales de Religion*
 R.F.S. = *Revue française de Sociologie*
 C.I.S. = *Cahiers Internationaux de Sociologie*
 AA = *American Anthropolologists*
 RP = *Revue philosophique*